菊池短歌会　9月詠草

核廃絶の論議白熱するなかに定かならねどこほろぎのこゑ　山代静子
古木なる柘榴よ命生きつぎて残る二、三コ実れと見上ぐ　岩木妙子
残暑なほ酷しき畑に草引けばけだるき声に山鳩の鳴く　岩永典子
高だかと掲げ咲きたる百日紅五風十雨に生命永かれ　氏岡百枝
友の訃を聞けし夜更けの星月夜仰げば一つしたたりて落つ　梅田昭子
眼裏に亡母顕たしめて娘として足らざりし事しみじみ憶ふ　梅野カヲル
山栗の小さきつぶら実手に渡すわれより夫への秋のひとつぶ　北島多喜
熊蝉のはたと鳴き止む青葉陰梅雨明け近き風透るなり　黒田衣子
三十年動き続きし腕時計ある夜静かに止まりてゐたり　古賀勝士
さるすべり白盛りあげし潔白も共に濁世の風に吹かるる　竹野美智代

万句の里俳句会　9月句会

遠く居て病む友案ず秋の暮　小山照子
風の意の儘にならざる槇櫨の実　田中美智
唐突に話の中に桐一葉　吉井綾子
頬かすめ風に戻りし夕蜻蛉　丸山美代子
田の神の辺りは濃かり曼珠沙華　岩木敬治
思ひきりカットして髪爽やかに　打出　貞
家中にただよふ匂ひ秋刀魚焼く　野中公枝
空耳かいやふるさとの遠花火　隈部輝子
大阿蘇の裾野広げて蕎麦の花　田島房子
花束に少し添へられ吾亦紅　加藤妙子
ほとばしる棚田の水路彼岸花　北村妙子
風のまにとぎれとぎれの秋の蝉　平山邦子

肥後狂句桜会　例会入選句集より

お待ちかね　両家にとって初の孫　光堀善教
お待ちかね　組閣本部がお呼びです　田中孝幸
お待ちかね　郷土力士のお国入り　田尻浩風
慌てました　嘸そっくりと乗り合わせ　須藤新生
慌てました　彼女のメール消しとらん　窪田明徳
慌てました　窓から投げた男靴　高倉新米
慌てました　先妻さんと鉢合わせ　高木房恵
這い回り　草と喧嘩の絶えん庭　狩野本六
憎い男　夢中にさせて知らんふり　小川繁美
憎い男　貢がせとってドロンした　藤野清子
続いとる　離れに橋の架かっとる　田中レイ子
続いとる　告白できん片思い　上村〇子

泗水短歌会　9月詠草

一面の緑田掠む鷺の群れ白冴えざえと西方指せり　平嶋さくえ
星空を窓開けながむ此の世界私の明日が在るのかしらと　宮本峯子
草取りも今日は此処までたち上がりひとり暮らしの我が身をいとう　大島きと
臥所にそそぐ月光に身を横たへて己が手足をさすりてゐたり　増田久美子
幾たりの身近き人等の住み処指し今日の没り日は真西に帰る　吉安永子
病みし身に草茫々の花の畑ジンジャーの白のかをりが届く　福原美智子
雨の降る屋敷の隅にほほずきは忘れず今年も色どりそえる　矢野悦子

長崎の無数の灯に見惚れ居り灯火覆いし昔はありき　高藤タツノ
一辺が他の二辺より短いと知るや野良猫家前よぎる　長尾はるみ

せせらぎ俳句会　9月例会

老眼鏡拭き直しもす暑さかな　服部静子
祝はるる面映ゆさにも慣れ敬老は　藤本邦浩
窓に来し守宮眺めつ仕舞ひ風呂　藤本アツ子
手の届くところ雲行く阿蘇の秋　村山数恵
秋あかね夕日を浴びて尚赤く　五丁義昭
肥後ぼうぶら一番なりをレシビする　寺本和子
曼珠沙華咲かせ番所の棚田かな　内村泊虹
自転車と並んで飛んだとんぼかな　（高一）渡辺一史
日が落ちて疲れて寝たか蜩よ　（高一）渡辺大寿

肥後狂句水笑会　9月例会

こだわって　地酒で無ァとはるかかす　井手水光
露天風呂　満天の星あびりよる　続　義昭
露天風呂　裸で出来る紅葉狩り　神尾迫水
揺り起こし　しゃりむり赤子泣かせよる　吉岡三水
こだわって　他人の言うこつ聞かっさん　柏原乗仏
揺り起こし　生き返らしたホトケさん　宮上美由
揺り起こし　息はしとるか見ていこか　御手洗三代
露天風呂　まあ傘しゃあち入っとらす　平井紅彩
なしだろか　隣同士で物言わん　中島五女
露天風呂　覗かす人ば覗きよる　山隈好茶

七城短歌会　9月詠草

炎天に萎えいし野菜ひと夜さの露分かち合ひ　岩崎照代
朝に生き生き　木下陽子
廃家なる庭垣に茂る朝顔が主待つがに花競ひ咲く　水田紗陽子
高齢者の講座の研修山里の人形浄瑠璃見惚れるばかり　中尾ヨシコ
世に怖きものなき年経る我なれど蚊アレルギー症の悩みが尽きぬ　池田カツ子
行く方は右か左か迷いゐる我の頭上に鷹が来て舞う　村上幾雄
豆畑に三度も我の目逃れきし雑草憎しと力込め抜く　佐々重弘
ショートステイの長かる夜に難聴の級友との会話とぎれるしばし　森　道子
野の道に涼風ありてふり仰ぐ朝の中空淡白き月　高木　精
テッポウ百合の白花庭に連なりて暑きを憂う盛夏憎めぬ　岩津　涼子
命ありて今年も秋を迎えたり青田の空を飛ぶ群蜻蛉　松岡みちえ

旭志文芸俳句会　9月詠草

身の丈は孫に越されて秋の月　中尾ヨシコ
薬師堂ほそき参道カンナ燃ゆ　芹川のり子
夏帽子かたへに置きて墓参かな　水谷ミネ
孫浴衣帯は文庫に締め上ぐる　東　芳子
おちこちの不況をよそに遠花火　芹川蓉子